

林業相談

グイマツ自然受粉雑種の選苗について

問 グイマツ雑種はカラマツ以上によく伸びると聞いていますが、北見産のグイマツ雑種のタネをまいたところ、苗高の著しく小さなものが相当数でした。このようにグイマツ雑種の苗木はふぞろいなもののでしょうか。 (長沼 I 生)

答 まずタネのなかみに触れようと思います。まいたタネが北見産ということなので、これは北見林務署の雑種採種圃産のものだと思います。この採種圃ではグイマツとカラマツの精英樹クローンを列状に混植して、自然受粉によるグイマツとカラマツとの1代雑種を生産しています。球果はグイマツからだけ採取していますから、このタネには、カラマツの花粉がかかったグイマツ雑種とグイマツの花粉がかかったグイマツ純粋種とがまざっています。タネの段階で両者を区別することは不可能なので、苗木で両者をふり分ける必要があります。ふり分けは、まきつけ当年の幼苗のうちに行うのが効率的です。

幼苗の苗高は、両者できわだちがいがあり(写真-1)、グイマツ雑種はだいたいカラマツと同じくらいの大きさですが、グイマツ純粋種は通常では雑種の3~4割程度の大きさしかなく、当場の記録では成績の良い年でも10cmを超す個体はほとんどみられません。また、生長期間も両者では相当にちがいます。グイマツ純粋種では、7月の下旬には芽を止めるものがでてきて、通常9月の第1週目にはほぼ芽止まりを終えるようです。一方、グイマツ雑種は、8月の下旬に芽止まりする個体もごく一部あるようですが、9月の半ばすぎに芽止まりするのがほとんどで、おそいものでは10月の初めまで伸長しつづけます。ですから、実用的には9月の第1週あたりに芽止まりの状況をしらべ、すでに芽を止めているものをグイマツ純粋種、まだ伸長中のものをグイマツ雑種とすればよいわけです。そして、このころ芽の止まっている個体のほとんどが小さな苗木(グイマツ純粋種)ですから、あらかじめそれらの苗高を測っておいて、掘り取りの段階でその苗高を基準に、グイマツ雑種とグイマツ純粋種にふり分けるとよいと思います。

両者の形態などのちがいは成苗(1回床替2年生)になってなお顕著になります(写真-2)。苗高では、グイマツ雑種はカラマツと同じくら



写真-1 幼苗(1年生)の形態比較



写真-2 成苗(1回床替2年生)の形態比較

いかそれ以上になりますが、グイマツ純粋種では通常グイマツ雑種の6割程度のものです。また、当年生の主軸に発生する側枝（二次枝）の本数などにもちがいがみられます。グイマツ純粋種では側枝を発生させるのは通常3～4割がたの個体で、それらの平均でも3～4本と少ないのですが、グイマツ雑種はその9割がたの個体が側枝を発生させ、本数も平均で8～10本以上と多く、カラマツの形状に幾分似てきます。

さて、ご質問の著しく小さな幼苗は、おそらく、ほとんどがグイマツ純粋種であると考えられますが、天候や密度の影響などで、グイマツ雑種でもグイマツ純粋種なみに小さなものができますから、これらの小苗は別仕立てしておいて、成苗（1回床替2年生）の段階でふり分けてやればよいかと思えます。成苗での両者のふり分けは上のべた特徴を参考にすれば容易にできます。

（育種科 石倉信介）